

氏 名	知 念 奈美子
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（人間福祉）
学 位 記 番 号	甲人第24号（文部科学省への報告番号甲第602号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2015年11月18日
学 位 論 文 題 目	ソーシャルワーク視点を持つホームレスアセスメントツールの開発
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 芝 野 松次郎 （副査） 教 授 大 和 三 重 教 授 山 本 隆

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ソーシャルワークの視点を持つ、ホームレス者を対象としたアセスメントツールを開発することを目的としている。

ホームレス者の支援は、炊き出しやシェルターの提供といった応急的・対症療法的な支援になりがちであるが、長期的な視野を持ち、ホームレス者の自立生活を包括的に支援しなければ根本的な問題解決にはならない。こうした観点はエンパワーメントとストレングスに配慮し、生活を包括的に援助するソーシャルワークの視点そのものである。そのような視点を持つアセスメントツールを開発することが、ホームレス者の支援が対症療法や応急処置的なものではない、長期的な展望を持つ支援に貢献すると考えられる。また、慢性的な人手不足となっているホームレス支援現場において簡便に活用できるアセスメントツールの開発が必要であると考えられ、本研究着手の動機となっている。本研究では、日本で唯一のストリートペーパー（ホームレス支援のための路上雑誌販売という社会的ビジネスモデル）であるビッグイシュー日本のスタッフとその販売員（ホームレス者）を、それぞれ調査協力者と調査対象者としている。

本論文は、序章を含む6つの章から構成されている。以下に各章の概要を示すことによって本論文の要旨とする。

序章では、本研究の目的とともに、その背景及びホームレス支援のためのアセスメントツールを研究開発する意義を述べた上で、本論文の構成を示している。加えて、本研究のキー概念である「ソーシャルワーク」及び「ホームレス」について整理し、定義付けている。「ソーシャルワーク」については、2014年 I F S W（国際ソーシャルワーカー連盟）のグローバル定義を検討した上で、研究の趣旨に沿い、あえて2001年の旧定義に基づき定義し「人間と人間の生活を対象とし、その全体的なQ O Lやウェルビーイングの向上を目指して、『人』とその周囲を取り巻く『環境』の間に働きかける対人援助専門職の活動」で、ストレングスとエンパワーメントの視点（パースペクティブ）を重視する援助活動としている。「ホームレス」については、自立支援法に規定される狭義の定義よりは、岩田（2009）の住居喪失不安定就労者等を含む広義のホームレスを採用している。

本論に入り、第1章「ストリートペーパー『ビッグイシュー日本』とホームレス支援活動」では、まず本研究の調査対象となるビッグイシュー日本のモデルとなった社会的ビジネスモデルとしてのストリートペーパーについて、その沿革と概要を述べている。次いで、ビッグイシュー日本の沿革と概要について述べた後、成功を収めているイギリスのビッグイシューU Kや他国の状況を紹介し、日本のビッグイシュー

との文化的社会的背景の違いにも触れている。

第2章「先行文献研究」では、ソーシャルワーク理論や実践に関連する諸理論を文献研究し、実践現場におけるエコロジカル・パースペクティブ及びストレングス・パースペクティブの重要性について検討した上で、そうしたパースペクティブを持ったアセスメントが現場において必要とされているとしている。また、日本のホームレス支援の現場では、ソーシャルワーカーを含む専門職や常勤スタッフが不足している現状、新たな生活困窮者自立支援法がホームレスの自立支援に及ぼす影響、ソーシャルワーカー養成とホームレスや貧困支援現場での専門的人材養成の乖離について論じている。さらに、本章ではホームレス支援のためのアセスメントツールに関する国内外の文献研究を行っている。

第3章「ホームレス包括的アセスメントツールの開発過程」では、前章での文献研究に基づき、第1節第1項及び2項において、アメリカのホームレス支援団体 Colorado Coalition for the Homeless（以下CCH）の活動に注目し、CCHとCook、Farrell、Perlmanといった研究者が開発したColorado Coalition for the Homeless Consumer Outcome Scale（以下CCH-COS）を、本研究にとってもっとも重要なアセスメントツールとして位置付け、本研究における開発プロセスのモデルとなるCookらのスケール開発の手続きを詳細に紹介している。Cookら（2007）は、National Coalition for the Homeless（2002）が、ホームレス者を対象とした研究が身体的健康や精神保健といった単一の機能不全に焦点を当てる傾向があるとする報告を受け、ホームレス者を適切に支援するためには、生活の広範な領域をカバーするサービス・プログラムが必要となることを前提とする必要があるとした。そして、CCHが実際に提供するサービスに対応させた、社会生活領域全般のニーズを測定するためにCCH-COSを開発したとしている。

本節第3項では、CCH-COSの信頼性及び妥当性の検討過程について詳細に触れ、CCH-COSの内容的妥当性（content validity）を検証するために協力を得た専門家たちの臨床家、研究者としてのクオリティについても紹介している。信頼性に関しては、評価者間信頼性（inter-rater reliability）を検証するのにピアソンの相関係数 $r$ を用いていることと、構成概念妥当性についてはTrochim（2006）が妥当としている他尺度との相関の有無の検討によって収束妥当性と弁別妥当性を検証する手法を用いていることについて検討し、その詳細な手続きについて述べている。こうしたCCH-COS開発の目的、意義、プロセスの詳細な検討を踏まえ、かつ日本とアメリカとの文化的差異をも考慮した上で、日本のホームレス支援のためのアセスメントツールとして、応急的、対症療法的支援ではなく住宅問題、就労・就学問題、社会保障制度活用の困難、身体的健康や精神保健に関わる問題、薬物依存、社会関係の乏しさ等々についてアセスメント可能なツールの開発が必要であるとし、本研究においてはCCH-COSをモデルとしてアセスメントツールを開発するとしている。

本章第4節では、CCH-COSをモデルとした日本語版アセスメントツールの開発の詳細について述べている。開発過程は、翻訳プロセス以外は、原則的にCookら（2007）の研究開発手順に従って行われた。CCH-COSの翻訳は、本論文の執筆者自身と、大学教員及び臨床家各1名によってなされた。翻訳者は全員アメリカにおいてソーシャルワークの修士号を取得しており、ソーシャルワークの専門的知識と英語技能を備え、日本においてもソーシャルワークの専門的活動を行っている。翻訳は単なるCCH-COSの日本語訳ではない。各質問項目は7段階のライカート・スケールであるが、それぞれの段階について具体的な状況が簡潔に説明されている。その内容は、アメリカの文化及び法制度を反映しているため、翻訳者は専門的知識と英語技能を活かし、まず直訳した後、日本の文化や法制度に合うように状況の記述を修正するという作業を丁寧に行っている。こうして作られたアセスメントツール（以下CCH-COS修正日本語版）は、「住宅状況に関する構成概念」、「就労・就学に関する構成概念」、「制度活用状況に関する構成概念」、「身体的健康に関する構成概念」、「精神的健康に関する構成概念」、そして「薬物使用に関する構成概念」の6つの構成概念に関する質問項目からなる。このCCH-COS修正日本語版について、内容妥当性、信頼性、

構成概念妥当性（収束妥当性及び弁別妥当性）を、Cook ら及び Trochim が妥当だとし、コロラド大学の大学院生が活用するオンライン・テキストでも示されている手法を忠実に用いて、検討している。検討に際しては、ビッグイシュー日本のスタッフがアセスメントツールの実施に協力し、大阪と東京の両事務所に所属する販売員（ホームレス者）116人全員を実施対象者としている。収束妥当性及び弁別性を検討するために、Cook らが使用した住宅・就労／就学・身体的健康・精神的健康・薬物使用を計る比較対照尺度（自記式質問紙）と同じものを本研究においても用いている。それらは、WHO-QOL26、QOL尺度SF-36、BASIS-32、KAST-Mの日本語版（妥当性等検証済）に含まれる関連質問項目を用いている。制度活用の比較対照データは、面接によってサービス利用に関する知識を聞き取り評価したものである。

実施結果については、それぞれの構成概念ごとに比較対照尺度との相関を析出し、収束妥当性及び弁別妥当性を検討することによって、Cook らとほぼ同等の結果を得たとし、構成概念妥当性が概ね検証され、実践現場において活用し得る基準を満たしたとしている。しかし、信頼性に関しては、身体的健康及び精神保健の領域で十分な評価者間信頼性が得られなかったとした。その理由を検討した上で、信頼性向上のためにはアセスメントツールを使用する者に対してトレーニングが必要であると指摘している。

第4章「CCH-COS 修正日本語版評価者間信頼性の再調査」では、前章で明らかとなった課題の評価者間信頼性を高めるために、「アセスメントツール実施マニュアル」を開発し、それを用いてビッグイシュー日本大阪事務所のスタッフ4名に対してアセスメント・トレーニングを実施した後、大阪事務所所属の販売員28名に対してCCH-COS 修正日本語版を実施し、評価者間信頼性について再評価している。アセスメント・トレーニングに加えて、スタッフに対し身体的健康基礎知識と精神保健基礎知識に関する研修も実施している。再調査の結果、評価者間信頼性は、住宅、就労・就学、制度活用状況、身体的健康、薬物依存の各構成概念において信頼性指標であるピアソン  $r$  は大きく改善された。中でも身体的健康については .291 から .703 へと飛躍的に上昇した。しかし、精神保健構成概念には改善は見られなかった。

この再調査で、精神保健領域以外の評価者間信頼性が改善されただけでなく、アセスメント実施に協力したスタッフのアセスメント対する意識が変化し、アセスメントツール活用の動機づけが高まったとしている。その結果、現在ではCCH-COS 修正日本語版の改訂版を使用してインタビュー時にアセスメントを実施することがルーティーン化するまでになっているとしている。

第5章「結論と課題」では、本研究の成果を以下のようにまとめている。ホームレス者の生活を包括的に支援するためにソーシャルワークの視点から適確にニーズが把握でき、実施が簡便なCCH-COS 修正日本語版を開発できたとしている。一方、評価者間信頼性については、再調査においても精神保健領域の信頼性が担保できなかったことに言及し、精神科医療の診断や障害の分類そのものが専門家の間でも曖昧で意見が分かれていることに触れ、精神保健領域のアセスメントの難しさを指摘し、今後の課題としている。本研究の成果としてのCCH-COS 修正日本語版は、人と環境を包括的に捉えるソーシャルワーク視点を持ち、実施が簡便であるがゆえに、ビッグイシュー日本という一支援団体以外でも利用、共有されことによって、複数の支援機関が協働・連携して行う利用者支援において共通言語としての役割を果たす可能性があるし、本論文を締め括っている。

## 論文審査結果の要旨

本博士学位申請論文審査委員会による知念奈美子氏の博士学位申請論文審査結果の要旨について、課題も含め以下の3点にまとめ報告する。

### 1. ソーシャルワークの視点を持つ簡便なアセスメントツールの開発：学術的、実践的貢献

知念美奈子氏は、ビッグイシュー日本が、ビッグイシューUKをモデルとし、ホームレス者に仕事を提供することをミッションとする有限会社としてスタートした当初から、その活動に深く関わってきた。また、ビッグイシュー日本設立の数年後に、販売員（ホームレス者）らの自立生活を包括的に支援する目的で設立された認定特定非営利活動法人ビッグイシュー基金の活動にも関わってきた。ビッグイシュー日本及び基金の活動を通して、氏はホームレス者の自立支援について実践と研究を積み重ねてきた。そうした積み重ねから、現在の生活困窮者自立支援法や延長されたホームレス自立支援法に基づく諸施策による限定的なホームレス支援と、財源と人材に乏しい民間活動団体が制度の隙間を埋める形で行う支援では、社会的な課題であるホームレス者及びその予備軍と考えられる生活困窮者への支援は、応急的、対症療法的な支援にならざるをえず、自立を可能とする計画的、継続的、包括的な支援に取り組むことが難しいと実感している。

こうした問題の解決には、ホームレス者が自己効力感を得て、自立するための支援が、生活ニーズを包括的に捉え、多様な支援機関と情報を共有し、連携しながら計画的、継続的になされる必要がある。そうした援助は、エコロジカルな視点に立ち、ホームレス者の生活環境とそこに生じるニーズを包括的に把握し、ホームレス者の自己効力感を養い、ストレングスを高め、自立を促す援助でなければならない。つまりソーシャルワークの視点を持った援助でなければならない。しかし、知念氏も指摘するように、こうした視点でのホームレス研究は少なく、実践に活かされていないのが現状である。

本研究は、そうした研究を促進し、実践に活かすために、まず、必要となるソーシャルワークの視点に立ったアセスメントツールを研究開発することを目的としたものである。氏は、ホームレス支援のためのアセスメントツールに関する先行研究を丁寧に検討した結果、本研究の目的に合致するコロラド大学のCookらの研究を見出した。彼らが開発したCCH-COSとその開発手順をモデルとして、ビッグイシュー日本のスタッフと販売員の協力を得て、日本文化、法制度に適したCCH-COS修正日本語版を研究開発した。今後、氏の研究成果であるソーシャルワークの視点を持つアセスメントツールが広く活用されることによって得られるホームレス者のニーズとホームレス者の生活実態に関する情報は、この領域の研究推進に貢献する可能性を持っており、学術的な意義がある。そればかりではなく、今後協働する多様な機関との情報共有に役立つことに加え、計画的、継続的な援助の推進にも活用される可能性がある。ホームレス者への支援が応急的・対症療法的であるという課題を克服する可能性を有し、実践に貢献しうる研究成果として評価したい。

## 2. 現場との密接な連携による開発：研究と実践の乖離に対する問題解決

本研究におけるアセスメントツールの開発では、知念美奈子氏が長年関わってきたビッグイシュー日本の大阪及び東京事務所に所属する販売員に対してツールを使用し、内容妥当性、信頼性、構成概念妥当性の検討が行われた。社会的な接触をあまり好まず、コミュニケーションを取ることが難しい販売員も少なくないが、氏は、そうした販売員と良好な関係を築き、維持しながら、100名を超える販売員から調査協力を取り付けている。また、CCH-COS修正日本語版の実施、そして、評価者間信頼性向上のための再調査は、ビッグイシュー日本やビッグイシュー基金のスタッフから献身的な協力を得て可能となった。彼らと氏との長年の活動協力を通して培われた信頼関係がそれを可能にしたと言える。

本研究は、こうした当事者、サービス提供者、そして研究者の密接な連携による協働によって実現したと言ってよい。研究と実践の乖離が克服すべき課題として注目されて久しい。研究者と実践家の垣根を越えて「研究的臨床実践」が推進され、研究と実践の乖離の解消が進みつつあるとの見方もあるが、まだ十分とは言えないのが現状である。そうした現状において知念氏は、本研究によって研究者・当事者・サービス提供者の3者による密接な連携、協働を通して研究と実践の乖離解消の例を示したとも言える。それは、再調査結果に対する氏の考察の中に読み取ることができる。再調査はアセスメントツールの評価者間信頼性をより高めるためであり、ことに身体的健康及び精神保健の両領域における信頼性を高めるために行われた。そのブ



プロセスで、3者の協働によって両領域の基礎知識研修及びCCH-COS修正日本語版記入マニュアルを用いたアセスメント・トレーニングを実施している。その結果は、精神保健領域を除いて、アセスメントツールを構成する5つの領域で評価者間信頼性の改善を実現している。ことに身体的健康に関しては大幅な上昇を見た。しかし、氏が注目したのは、日常の業務に追われる中で、知らず知らずのうちにアセスメントを軽視する傾向にあったスタッフが、研究に参加し、その成果を実感することによって、アセスメントツールの重要性を再確認し、ツールの活用を日常の業務の中でルーティーン化することとなった点であり、現場において研究に参加することが実践に与えた影響であった。

本研究は、現場において研究者、当事者、提供者の協働の重要性を示すとともに、研究と実践の乖離の解消に貢献する可能性を示した研究としても評価できる。

### 3. 課題

本論文は、学術的にも実践的にも貢献度の高い研究成果として評価できるが、さらなる研究と実践の深化に期待して、以下の3点を課題として記しておく。

まず、氏がソーシャルワーク視点として重視したエコロジカル・パースペクティブ及びストレングス・パースペクティブは概ね研究成果に反映されてはいる。しかし、開発されたアセスメントツールによって把握されたニーズをホームレス者の包括的な支援に結びつける際に、それらがどのように活かされるのかが具体的に示されているとは言い難く、説得力に欠ける。今後の研究に期待したい。

次に、ホームレス支援の社会的ビジネスモデルとしてのストリートパーパーがホームレス支援において果たしてきた役割や、デジタル時代における課題なども検討され、本研究の意義を示すことに貢献している。しかし、ホームレス政策そのものや、社会的企業とその役割についての議論が十分になされているとは言えない。ホームレス政策や社会的企業についてさらなる研鑽を期待したい。

最後に、アセスメントツール開発において構成概念妥当性を収束妥当性と弁別妥当性によって検討した点は評価できるが、知念氏が考える、CCH-COS修正日本語版が包括的な自立生活支援のためのプランニングに繋がるかどうかについてはさらなる検証が必要となろう。ツールの「予測妥当性」や「標準化」といったものの検討もまた課題となろう。

以上、審査結果の要旨を説明したが、知念奈美子氏の論文は博士学位申請論文としての水準に達しており、博士学位の授与に値するものと判断する。